

漱石のマイ・ウェイ

Junko Higasa

明治 39(1906)年 10 月 23 日、漱石は狩野草吉かのうこうきち（第一高等学校長・京都帝国大学文学部初代学長）宛に手紙を書いている。「官庁の通牒的なものか用事がなければ手紙を書かない人」だと思っていた彼から「(予知夢のような不思議な)漱石の夢を見た」という文学的感覚を含んだ手紙を受け取った漱石は、驚きと不思議と感動を持ちながら彼に返事を書いた。その手紙の中に漱石の人生に対する意思が綴られている。

まずグルメな漱石は、東京と違いゆったりとした、特に松茸の季節の「君のいる美しい京都」へは遊びには行きたいが「仕事」は断ると書き出す。その理由を『自分の立脚地からいうと』そういう感じの良いところではなく、感じの悪い『愉快の少ないところにおいてあくまで喧嘩をして見たい』（以下引用：岩波文庫）と記し『それではなくては生き甲斐のないような心持がする。何のために世の中に生まれているかわからない気がする。僕は世の中を一代修羅場と心得ている』と続けている。そしてその中で自分の主義・主張・趣味から見て「世の中のためにならないもの」を敵とし『花々しく打死をするか敵を降参させるかどっちかにして見たいと思っている』と書いている。漱石は戦争支持者ではない。これはあくまで「人間社会」と「自分の人生」をどう作るかという戦いである。『世の中は僕一人の手でどうもなりようはない。ないから僕が僕を打死する覚悟である。打死をしても自分が天分を尽くして死んだという慰藉があればそれで結構である』自分の可能性は分らないが『どの位自分が社会的分子となって未来の青年の肉や血となって生存し得るかをためて見たい』とある。

漱石は自分の過去を振り返り「愚物だった」と評する。大学で成績が良く自負していた自分が、卒業後 10 年余り自分の人生がつかめなかった。進んで戦うことを好まない漱石は「自分が人間として平穏な人生を送ればよい」と思っていた。そして汚い奴が衆を頼みに下等な振る舞う東京を離れば別天地があると思えば地方へ赴任したが、やはり同じく下等な存在した。『草枕』の「どこへ越しても住みにくい」を実感する。そこで「文明の衣をつけた野蛮人を放置しては社会悪を増長させる」と思った漱石は『自らを潔くせんがために他人の事を少しも顧みなかった。これではいかぬ』と『坊っちゃん』のように社会悪と戦う決心をする。そして洋行から帰る船中で「人頼みに生きてきた 10 年を繰り返さぬ」と反省した通り『余は余一人で行く所まで行って、行きついた所で斃れるのである。それではなくては真に生活の意味が分らない。手応がない。何だか生きているのか死んでいるのか要領を得ない。余の生活は天より授けられたもので、その生活の意義を切実に味わうては勿体ない。金を積んで番をしているようなものである』と政治の中心地に留まり、未知なる自分の力を発揮して社会の分子となり、その中で「自分の番兵」でなく「自分の主人」になる決意をするのである。

東洋も西洋も人間のあり方は同じ。フランク・シナトラが歌った『My way』の中にあるように「恥ずかしくない生き方」の分子が集まればよい社会が育っていく。「天から授けられた力」を活用し「自分の人生を作る」それは社会を作ることでもある。

先の漱石の手紙の中には「素敵(ありのままの自分を生きる)」なマイ・ウェイを歩んだ彼の存在と共に「人生とは何か」という問いと答えが含まれている。(2012.11.10)